

日本語の他動性構文論の記述を目指して

——奥田靖雄構文理論の継承と発展——

志 波 彩 子

1. はじめに

本研究は、奥田靖雄が残した「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」(1968-72)及び「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」(1960、以下この2つの議論を合わせてヲ格連語論と呼ぶ)を日本語の他動性構文論¹として記述し直すことを目標としている。その前段階として、心理動詞による構文を例として考察しながら、ヲ格連語論の理論的な枠組みとしての奥田の構文理論を考察する。特に、次の2点の理論的枠組みについて議論する。

- ①単語によって構成された句・節・文は繰り返される使用により、慣習化され、抽象化・一般化される。このパターン化した構造は要素から相対的に独立して実在し、構造と要素は相互に影響しあいながら全体としての統合的体系(シンタグマティックな体系)を作り上げている。構造の要素として重要なのがカテゴリーカルな意味である。
- ②それぞれの構文は孤立して存在するわけではなく、他の構文と関わり合いながらパラダイグマティックな体系(ネットワーク)を成している。

以下、2節では奥田のヲ格連語論の概要を紹介し、3節では、奥田構文理論における統合的体系、構造、要素とパラダイグマティックな体系(ネットワーク)という考え方について考察する。4節では心理的関わり構文について、特に動詞「見る」を取り上げて議論する。

2. 奥田のヲ格連語論の概要(奥田1968-72)

奥田の「構造 construction」の考え方は、連語論の議論の中で具体的に述べられている。連語とは、2つないし3つの単語(自立語)から成る従属的な関係をもつ語の結びつきであり、主述関係や並列関係は含まれない。連語は単語(動詞)の結合価によって構成されるとしても、繰り返される使用によって出来上がった構造的なタイプ²としての連語は、内容(意味)

1 「他動詞構文」ではなく「他動性構文」とするのは、対象とする動詞の中に使役動詞も一部含まれているからである。

2 タイプとは横の体系(パラダイグマティックな体系=ネットワーク)におけるそれぞれの型の呼び方としてあり、パターンとは縦の体系(統合的な体系)における型の呼び方としてある。

と形式をそなえた言語の単位として、単語とは相対的に独立して存在する（3節で詳述）。

ヲ格連語論は、ヲ格名詞が動詞に対して持つ「関係性」によってタイプ分けされ、それぞれの構造的タイプの特徴と相互関係が記述されたものである。このため、必ずしも他動詞に限らず、「道を歩く」等の自動詞とヲ格の組み合わせも含まれている。本研究は、このヲ格連語論のうち、「対象的なむすびつき」とされる、他動詞とヲ格名詞との結びつきを記述したものを、他動性構文の記述と読み替えて、修正を加えながら発展的に記述したいと考えている。

2.1 他動性構文の全体像

奥田の連語論では名詞と動詞の従属的な関係のみが扱われ、主述関係は連語とは見なされない。これは、主語と述語の関係は陳述的な関係であり、陳述的關係とは必ずテンス性、アスペクト性、及びムード性を帯びると考えられたからである。連語とは、こうした陳述性を持たない、純粋に対象的な意味のみを持つ構造として取り出されている。

しかしながら、本研究では主語のガ格名詞も含めて、構文として記述していく。ガ格を含めた名詞と動詞との関係も、モダリティやテンス・アスペクトを含まないレベルとして記述できると考えるからである。また、他動性構文において、すべての構文が動作主のガ格を取るのであれば、主述を含まない記述で十分だと言えるが、他動性構文の中には次のように、特殊な構造を持つ構文が存在する。

- (1) a. 強烈な自己主張は本来の魅力を弱める。
b. 彼女の態度は彼を少なからず {驚かせた／圧倒した／苦しめた}。
- (2) a. 彼らは {結束／決意／方針／守り} を固めた。
b. 私たちは意識を変えて、{自覚／主体性／自給率}を高める必要がある。

(1)では、主語に人間の動作主ではなく、原因としての事柄が立っている。これらの事柄は、「強風が木々をなぎ倒した」のような、動作主に準ずるような物理的エネルギーを持った自然勢力とも異なり、動作主性のない名詞である。こうした構文では、動作主ではない名詞が主語に立つということが、構造の特徴となっている。次の(2)では、ヲ格名詞が主語の外部にある別の実体ではなく、主語自身の内部にあるもので、要素間の関係が再帰的になっている。再帰文とは、通常、「メガネをかける」や「爪を切る」のような、主語の身体部位がニ格やヲ格相当であるものが知られるが、このように事柄への働きかけを表す構文には、広義の再帰構造を特徴的に持つ構文がある。

以上の理由から、本研究では主語のガ格を含めて、「他動性構文」として記述していく。

ここに、奥田のヲ格連語論を下地とした、他動性構文の概略的な全体像を示しておく。あくまでも、他動性構文のリストであり、これが奥田のヲ格連語論そのものを表しているわけでは

ない。奥田のヲ格連語論の全体像については、早津 (近刊) や奥田 (1968-72) を参照されたい。

1. 動作構文	1a 対物動作	1a-1 状態変化 (もようがえ) 「枝を折る」「サンマを焼く」 1a-2 付着 (とりつけ) 「手帳にシールを貼る」「本にカバーをつける」 1a-3 除去 (とりはずし) 「扇を帯から抜き取る」「壁のチラシを剥がす」 1a-4 運搬 (うつしかえ) 「荷物を車から玄関へ運ぶ」 1a-5 接触 (ふれあい) 「頬をさする」「頭をかく」「ボールを蹴る」 1a-6 生産・作成 (結果的) 「赤飯を炊く」「端切れでスカートを縫う」
	1b 対人動作	1b-1 生理的状态変化 「彼の態度が美子を疲れさせる」 1b-2 心理的状态変化 「その口調が涼子を苛立たせる／おどろかす」 1b-3 空間的位置変化 「子どもを駅に行かせる」「客を書齋に通す」 1b-4 社会的状態変化 「教師を雇う」「娘を嫁がせる」 1b-5 催促 (よびかけ) 「子供を掃除するよう促す／急ぎ立てる」
	1c 対事柄動作	1c-1 変化 「稽古が学生の緊張感を高める」「組合員が結束を固める」 1c-2 出現 「家庭を作る」「解体をきたす」「幸運をもたらす」
2. 所有構文	2a 授受 (やりもらい)	「親にお金を預ける」「友達に辞書を貸す」
	2b 所持・保有 (ものもち)	「東京に家を持つ」「お金を稼ぐ／貯める／失う」
3. 心理的関わり構文	3a 認識	3a-1 知覚認識 (感性的) 「空を見る」(内容規定*「寂しさを感じる」) 3a-2 知的認識 「理想主義の影響の深さを思う」「方針を考える」 3a-3 言語活動 (通達) 「友人に惨めな境遇を話す」「(愚痴を言う)」
	3b 態度	3b-1 感情評価的態度 「彼を／文学を愛する」「師を／文化を敬う」 3b-2 知的態度 「花子を敵と見なす／判断する／解釈する／考える」 3b-3 表現的態度 「(いい加減にしると) 子供を叱る／褒める」
	3c モーダルな態度	3c-1 要求的態度 「学生に掃除を頼む／入室を許可する」 3c-2 意志的態度 「毒殺を企てる」「花子に結婚を誓う」
	3d 動作的態度	「ハサミ／新しい理論を使う」「子供を／伝統文化を守る」
4. 関係構文		「感染拡大は社会経済の崩壊を意味する」「5人の議員が委員会を構成する」

図1 ヲ格連語論を下地とした他動性構文の全体像

*「内容規定とは、ヲ格名詞と動詞の対象的な関係とは区別されて立てられたタイプである。「{寂しさ／不安／寒気}を感じる」などの名詞は、主語者の外部にある対象ではなく、主語者の内部に「感じる」ものであり、かつ対象として感じたものを「寂しさ」と規定していると考えられる。同様に、「{愚痴／嘘／お世辞}を言う」なども内容規定的なむすびつき (関係) である。例えば、「太郎の正直さを言っているのだ」であれば、その「正直さ」というのは対象であるが、内容規定構文ではこうした対象を「愚痴」や「お世辞」などと規定していると考えられる。

奥田 (1968-72) では、「対象的なむすびつき」(他動詞とヲ格名詞との組み合わせ) を大きく「対象へのはたらきかけ」「所有のむすびつき」「心理的かかわり」の3つに分類している。本研究では、これに奥田 (1960) における「論理的な関係の表現」を加え、「関係構文」とい

う構文を立てた。そして、「対象への働きかけ」を動作構文、「所有のむすびつき」を所有構文、「心理的かかわり」を心理的関わり構文と呼んで、4つの大きな構文タイプを立てた。

動作構文には、《具体物》をヲ格とするもの（対物動作構文）、《人》をヲ格とするもの（対人動作構文）、《事柄》をヲ格とするもの（対事柄動作構文）があるが、いずれも対象を変化させる働きかけを表す点で共通している。次の所有関係構文は、ヲ格の対象そのものの変化ではなく、所有権の変化、あり方を表す構文である。3つ目の心理的関わり構文は、対象への働きかけのプロセスから心理的な関わり段階のみを表した構文である。最後の関係構文は、主語と対象との関係のみを表す構文である。

これら4つの構文の中に、さらに細かい下位タイプを立てている。これら、すべての構文のあり方については、大分類が上の4つでいいかどうかも含めて、今後調査を進めながら詳細に検討していく必要がある。

2.2 対物動作構文（物にたいするはたらきかけ）

本研究では、奥田の「構造的なタイプ」という考え方を継承し、この構造と要素とが一体となった組織（構築物）を「構文」と呼んで記述していく。ここでは、対物動作構文を例に、構文とは具体的にどのようなものかについて説明する。対物動作構文は、先の図1の全体像の最上段の1aのタイプである。

奥田が「物にたいするはたらきかけ」と呼び、本研究で対物動作構文と呼ぶ構文には、次の6つの下位構文タイプが存在する。

(3) 対物動作構文の下位構文タイプ

状態変化 [N《具体物》ヲ (Adjク/ニ) Vt《状態変化》] 「くるみを(粉々に)割る」「お茶を冷ます」

付着 [N₁《具体物》ニ N₂《具体物》ヲ Vt《付着》] 「机に花を置く」「財布に小銭を入れる」

除去 [N₁《具体物》カラ/ノ N₂《具体物》ヲ Vt《除去》] 「魚を串からぬく」「壁の時計を外す」

運搬 [N₁《具体物》ヲ N₂《空間》カラ N₃《空間》ニ/へ/マデ Vt《運搬》] 「俵を倉庫へ運ぶ」

接触 [(N₁《具体物》デ) N₂《具体物》ヲ Vt《接触》] 「頭をかく」「トングで火をいじる」

生産 [(N₁《具体物》デ/カラ) N₂《具体物》ヲ Vt《生産》] 「家を建てる」「米粉でケーキを焼く」

上のNは名詞を、Adjは形容詞・形容動詞³を、Vtは他動詞を表す。また、《 》でくくった中には単語のカテゴリカルな意味(3.3で詳述)を記入している。例えば、状態変化構文であれば、ヲ格名詞は具体物名詞である必要があり、動詞は対象を状態変化させる他動詞である。

3 ここでは、形容詞や形容動詞の連用形という意味でAdjとのみ記載しているが、より正確に規定するならば、属性形容詞と呼ばれる類の形容詞であると考えられる。この属性形容詞の「属性」というのも、カテゴリカルな意味である。

この構文では、「ばらばらに（くたく）、どろどろに（溶かす）、（白く）塗る」などの結果の副詞句（仁田1982）と呼ばれる副詞成的分が共起することが構造の特徴となっている。こうした成分は、構造にとって必須の要素ではないが、この構文を他の構文と区別するための重要な構造的特徴となるものである。

次の付着構文は、具体物を具体物に取り付けることを表すもので、除去構文は具体物から具体物を取り除くことを表す構文である。そして、次の運搬構文であるが、これは付着や除去の構文と似ているようでもあるが、二格名詞やカテゴリー名詞が具体物ではなく、「倉庫、部屋、二階、玄関」といった空間名詞であることが特徴である。これら3つの構文は、一般的な日本語学や言語学の中ではまとめて「位置変化」と呼ばれることが多い。

接触構文は、対象を変化させることを目指して働きかける一連の動作のうち、接触の段階のみを表す動詞で構成され、対象の変化を含意しない、無変化の構文として知られる。最後の生産・作成構文は、ヲ格名詞が動作の成立後に現れる結果物（生産物）である構文である。

これら6つの構文は、典型的な構造形式でもって相互に対立しながら、「対物動作」という共通点でまとまって1つの体系を成している。この体系の中では、構文同士は相互に移行する関係にある。この点について、簡単に説明する。

例えば、「割る」「結ぶ」という動詞は状態変化動詞であり、通常は「水を割る」「リボンをむすぶ」などの状態変化構文を構成する。一方で、「お皿に卵を割る」「頭にリボンを結ぶ」という構造の中では、付着の意味を帯びている。ここでは、本来付着の意味を持たない状態変化動詞の「割る」「結ぶ」が、[具体名詞ニ 具体名詞ヲ 動作動詞]という構造で使われることで、構造によって付着の意味（割り入れる、結びつける）を帯びるのだと考える（奥田1976）。

「取る」という動詞も、通常は除去動詞として、「カバンから財布を取る」という時には除去構文であり、「取り出す」という意味を表している。これに対し、「小皿に料理を取る」という組み合わせは、付着構文に移行している。ここでは、臨時にこの構造で用いられたというよりも、「取る」自体が、除去の意味だけでなく、付着の意味をもその語彙的な意味として持っている⁴（奥田1976）。

こうした構文間の移行関係をパラダイグマティックな体系（ネットワーク）と呼ぶ。構文のパラダイグマティックな体系は、同じレベルの下位構文同士だけではなく、構文のレベルを超えて生じる現象である（第4節例(5)(6)参照）。本研究は、構文間のパラダイグマティックな体系を記述することで、他動性構文を体系的かつ網羅的に記述することを目指している。

⁴ このような、構造によって臨時にもたらされる意味なのか、すでに動詞の語彙的な意味の構造の中で別義として定着した意味なのかは、連続的である。奥田（1968-72）では、語が多義になるプロセスに連語の構造が関わっているという興味深い議論が提示されている。

3. 体系、構造、要素

本節では、本研究が継承したいと考えている奥田構文論の基本的概念である、体系、構造、要素とは何かについて考察する。

3.1 構造と構文

2つ以上の部分がむすびについて一つの全体を成しているとき、それらの部分は無秩序に集まっているわけではなく、ある一定の意味のある結びつき方で結びつきながら全体を成している。この、ある一定の意味のある結びつき方の秩序が、構造である。別の言い方をすれば、「要素間の関係の秩序」が構造である。そして、この構造は繰り返される使用によって抽象化・一般化され、社会慣習的なパターンとして存在するのだと考える⁵。この社会慣習的なパターンを奥田では「構造的なタイプ」と呼んでいる。構造的なタイプは、それ自体が要素とは相対的に独立して意味を持っている。つまり、「形式と意味の統合体として存在する」と考える点では、近年、認知言語学で盛んに議論される「構文文法」の「構文」の概念に共通している (Goldberg 1995, 2006, Croft 2001⁶)。

奥田 (1976 [1985: 76]) は、連語の構造について、次のように述べる (ゴシックは志波による)。

【連語の】この構造的なむすびつきは、つねに構成要素の構文論的な特性によって作りだされているとすれば、構成要素にたいして受動的である。しかし、ひとたびできあがった構造的なむすびつきが、ぎゃくに構成要素である単語の語彙的な内容にはたらきかけて、その変更、修正、あるいは追加をもとめるとすれば、この構造的なむすびつきは、構成要素にたいして積極的でもあって、相対的な意味における独立性を主張する。構造的なむすびつきを実現する、連語の構造的なタイプは、いろいろの構成要素=単語にたいしては、あたかも独立的な存在のごとくふるまう。

動詞は、その表わす事態により、どのような参与者を項としてとれるか、どのような参与者と組み合わせるか、という潜在的な能力を持っている (これを結合価⁷と呼ぶ、仁田1974等)。

5 工藤 (1989 [2016: 228]) では、次のように書かれている。「現象的に無限に多様な文は、陳述的なタイプとして、構造的なシェーマとして抽象され、類型化されて、有限の「型」として組織されている。文は、まさに言語活動の単位として機能するために、言語の〈構成体の型〉として、社会慣習的に存在させられる。つまり、現象として無限に多様な文にも、有限の抽象的なタイプ (型) があるということを述べている。ただし、ここで工藤が言っている文のタイプとは、陳述的なもの (モダリティ) をも含んだレベルの構造的タイプである。

6 「構文」を言語の単位として積極的に認める論者に共通の見解は、構文とはその都度積み木のように組み立てられる実体のないものではなく、単なる部分の寄せ集めではない全体として意味を持ち、形式と意味の統合体として、語彙項目と同様に心理的に実在する、という点だろう。

7 奥田 (1976) では、結合価について、「単語の valence とは、単語の語彙的な意味がほかの単語のそれとむすびつくとき、あらわにする構文論的な特性である」(奥田1985: 73) と述べている。この動詞の結合価 (主

文は動詞が持つこの能力によって組み立てられるのだが、そうした文が繰り返される使用の中で一般化され、抽象化されて「型＝シェーマ」として定着する。繰り返しの中でいったん出来上がった型＝構造的タイプは、独立した実在体として自らの特性を主張し、要素に対しその構造の構成員たるべく働きかける（奥田1968-72, 1980-81、志波2015）。これは、例えば先の「お皿に卵を割る」であれば、「割る」という状態動詞（要素）に「割り入れる」というニュアンスを構造がもたらす、ということである。

奥田（1980-81）では、文とは統合的な（シンタグマティックな）体系、ひとまとまりの体系であるとされ、その全体としての統合的体系の内部には、構造と要素（部分）があると述べられている。構造とは、要素を結び付け、ひとまとまりの体系へとまとめ上げるものである⁸。そして、構造は要素間の関係の秩序なのだから、要素とぴったりとゆ着している。両者の存在は常に同時的であり、構造は要素から相対的には独立しているが、絶対的に独立しているわけではないことを強調する⁹。この構造と要素がゆ着した全体を、奥田は「構文論的な構築物」と呼んでいる。本研究では、奥田が「構文論的な構築物」と呼ぶ、構造と要素が一体となった全体を「構文」と呼んで記述の方法論としていく。

(4) 構造：2つ以上の要素の間の有機的な関係の秩序のこと。

構文：2つ以上の要素と構造からなる全体としての構成体。くり返される使用によって慣習化され、抽象化・一般化されたパターンとして社会慣習的に実在する。

3.2 要素と構造（語の多義性について）

構造と要素の関係は、語と文のレベルに限らず、語と複合語、節と複文、文と連文構造（テキスト）といった、言語のあらゆるレベルに当てはまるものである。ここでは、語と文の関係を例に、要素と構造の関係について説明する。

奥田（1967）は、語（要素）の意味は構造の中で決定されるという観点を、多義語の説明に取り入れるべきだと主張している。語の意味とそれを支える構造的特徴（構造的条件）を指定しなければ、語の意味の記述が恣意的で主観的になるからである。

に格支配）によって文の構造をとらえようとする研究（仁田1986、森山1988等）と奥田の構文理論との違いについては、早津（近刊）に詳しい。

8 シntagマティックな体系、構造、要素の関係は、人体を例にすると分かりやすい。人体は、頭、腕、胴体、足などいくつかの部分＝要素から成り立っている。これらの部分は、意味のある結びつき方で有機的に結びつき、全体としての人体を成している。そして、その結びつき方の秩序（パターン）は、「人体」という意味を持つすべてのメンバーに共有されている。

9 この点は、Goldberg（1995）の構文文法と大きく異なる点である。Goldbergは、構造があたかも要素から完全に独立したものとして存在するかのように構文を提示し、構文の多義性について議論している。しかし、構文が多義的なのではなく、要素との相互作用により、文の最終的な意味に異なりが生じるのだ、と考えるのが自然である（志波2015）。

例えば、茶谷（2020）では、動詞「つかむ」の多義を構造的条件とともに記述することが試みられている。「つかむ」という動詞は、[N《具体物》ヲ つかむ]（「取っ手をつかむ」）という構造では、先の他動性構文の「接触」の構造になり、「指をまげて物を手の中におさめる」という意味になるが、「客（の心）をつかむ」のように対象が《人》を表す名詞になると「惹きつける」という意味になるとする。また、「{勝利／成功／レギュラーの座}をつかむ」など、《社会的に目指す価値のある状態》を表す名詞と組み合わせさせて「獲得する、成し遂げる」という意味を表す。さらに、「{情報／消息／証拠}をつかむ」のような《情報》を表す名詞と組み合わせると、知的認識としての「手に入れる、知る」という意味になる¹⁰。

以上の紹介は概略的なもので、茶谷（2020）の議論の一部を取り上げたにすぎないが、ここで重要なのは、語（要素）の語彙的な意味の大部分は構造の中で決まってくるということである。そして、構造とは、要素間の関係の秩序であるので、構造の本質とは「関係性」である。つまり、各語（各要素）の意味は、他の共起する要素との関係性の中で、その語の語彙的な意味の中の一つが引き出されてくる、ということである。

3.3 要素としてのカテゴリカルな意味¹¹

さらに、本研究では、構造の要素として、単語の「カテゴリカルな意味」の重要性を提唱している。カテゴリカルな意味とは、単語の語彙的な意味のうち、文法的な振る舞いに関わる、あるグループに共通の語彙的な意味のことである。早津（2015）では、「個々の単語の語彙的な意味のなかで、その単語の文法的（形態論的・構文論的）な性質をうみだし支えている一般的な側面」（p. 14）と規定されている。また、奥田（1974）では、「カテゴリカルな意味は、語彙的な意味の構造のなかで文法的な機能をはたしている部分である」（奥田1974 [1985: 49]）と述べられている。

例えば、シテイルの文法的な意味が「動作継続」になるのは、動詞のカテゴリカルな意味が《動き・動作》の場合であり、「結果継続」になるのは《変化》の場合であることは一般的によく知られる。「—がる」という接辞を後接する形容詞は、「大きい、白い、固い、高い」などの《属性》を表す形容詞ではなく、「嬉しい、寂しい、面白い、暑い」といった《感情評価・感覚》というカテゴリカルな意味を持つ形容詞である（早津2015）。

名詞の意味においても、「{会社／公園／2階}で同僚と話す」におけるデ格の文法的な意味（意味役割）は「場所」であるが、「{台風／土砂崩れ}で木が倒れた」のデ格は「原因」を

¹⁰ ここではヲ格名詞に共通の意味的側面（カテゴリカルな意味）のみを取り上げたが、例えば知的認識構文である「情報を手に入れる、知る」という意味においては、間接疑問節をヲ格に取ることができる（「警察は犯人がどこにいるかをつかんでいる」等）などの構造的特徴も、意味を支える構造的条件として重要である。

¹¹ カテゴリカルな意味については、早津（2015, 2016）に詳しい。多くの具体的な事例とともに、カテゴリカルな意味の考え方が紹介されており、本稿の記述も早津の議論に依拠している。

表している。こうした文法的な意味の違いをもたらすのは、「会社で同僚と話す」におけるデ格名詞が《空間》名詞であり、「台風で」におけるデ格名詞が《現象》名詞で、かつ動詞が《無意志》動詞であることによると考えられる。さらに、同じ「会社」という名詞でも、「{会社／病院／区役所／学校}に勤める」における「会社」は、《組織》というカテゴリカルな意味で構造に参加している。このような、《空間》、《現象》、《無意志》《組織》といった、構造を構成する語と範疇関係にある語の語彙的な意味に共通の意味的な側面が、カテゴリカルな意味である¹²。よって、「大学」という名詞のカテゴリカルな意味は何か、ということを開くことはできないと言える。カテゴリカルな意味とは、単語が構造に要素として参画するとき（つまり、他の要素と関係しながら組織を成すときに）露わになる、語彙的な意味の一側面だからである。

このように、語彙的な意味の一側面が文法的振る舞いに関わっているということは、従来の日本語学、言語学の研究の中でも気づかれてきたことである。例えば、動詞が《意志》か《無意志》か、形容詞が《感情》か《属性》か、名詞が《具体》か《抽象》か、ということも、これまで、分析の方法論として使われてきた。しかしながら、カテゴリカルな意味が構造の要素として極めて重要なものであることについては、意識的には議論されてこなかったのではないか。また、ある語や文法形式の意味が曖昧になる条件としても、カテゴリカルな意味は非常に重要である。従来の研究で、「意味は文脈によって決まる」として片付けられてきた多くの現象は、カテゴリカルな意味を指定し、考察することで、構造的な条件として記述できるものが多いと考える。

以下の議論では、このカテゴリカルな意味が、構文間の関係を描く上でも非常に重要な条件となることを議論していく。

4. 心理的関わり構文の体系

本節では、先に図1で示した他動性構文の体系における心理的関わり構文を取り上げ、心理的関わり構文の下位構文タイプの特徴と構文間の関係を考察することで、奥田の構文理論を確認し、修正していく。

奥田（1968-72）では、「心理的関わり」が他動詞として、他動構造を持つ意義について、「心理的なはたらきかけをあらわす連語は、人間の対象にたいするはたらきかけのうちから、

12 こうした文法的な意味とカテゴリカルな意味はしばしば混同されることがある。「公園で遊ぶ」におけるデ格の「場所」という文法的意味と《空間》というカテゴリカルな意味も紛らわしいが区別する必要がある。また、「ペンで書く、ナイフで削る、ハサミで切る、箸で食べる」などのデ格名詞に共通の側面は「道具」であると考えたくなるが、「ビール瓶で殴る、布で包む」などを含めて考えれば、「道具」というのはあくまで文法的な意味であり、カテゴリカルな意味ではない。これらの名詞に共通の側面を取り出すなら、《具体物》となるだろう。

心理的な側面だけをぬきとって、表現している」(奥田1983: 90)と述べられている。つまり、「山道を歩く」等と異なり、これは広義の働きかけであり、他動性がある、ということである。さらに、多くの物理的動作の他動詞が心理的関わり動詞に移行していることから、両カテゴリーが他動性の体系の中で隣接していることが分かるとする。例えば、「調べる、暴く、裁く、退ける、勧める」等は、もともとは動作動詞であったものが、物理的な動作の意味をほとんど失い、心理的関わりを表す動詞に移行している。また、「取る、捉える、つかむ、飲み込む、こぼす、汲み取る、漏らす、おす、なめる」等の動詞は、抽象名詞のヲ格と組み合わせることで、心理的関わりを表す動詞に移行する多義語になっている(奥田1968-72 [1983: 89-90])。

- (5) a. 飴をなめて、のどを潤す。【対物動作(接触)】
 b. 彼は{先輩/試験/仕事}をなめている。【心理的関わり(感情評価の態度)】
 (6) a. 夏子のご飯をゆっくり飲み込んだ。【対物動作(状態変化の周辺)】
 b. 夏美は{意味/説明/真相}を飲み込むのが早い。【心理的関わり(知的認識)】
 c. 夏生は{言葉/言いたい気持ち}を飲み込んだ。【心理的関わり(言語活動の周辺)】

このような、《物理的動作》から《心理的関わり》への移行は、次の(7)(8)のように、今なお進行中である(これらの例は未だ臨時的かつ比喩的に心理的関わりを表しているにすぎない)。こうした移行関係の存在は、両構文が《他動性》の体系としてまとまっていることを示しているのだと述べている(奥田1968-72 [1983: 90])。

- (7) しかもその仕事ぶりは伝統的墨絵の約束などまったく蹴とばした、傍若無人なやり方である。(岡本太郎『青春ピカソ』)
 (8) だが、そのヨーロッパでは、理想をそのまま実現することはできなかつた。中世以来の騎士階級や社会的身分制度を完全に切り捨てることができなかつたからだ。(堺屋太一『組織の盛衰』)

さて、本節では、上述してきた奥田靖雄の構文理論のケーススタディとして、心理的関わり構文の体系性について、動詞「見る」を中心に議論し、考察する。心理的関わり構文を扱うのは、物理的な動作動詞に比べて、心理動詞の研究が遅れている印象があるからである。

心理的関わり構文は、大きく認識構文と態度構文に分類される。心理的関わり構文の中心は、この2つの下位構文タイプであり、以下の議論では、認識構文と態度構文を中心に見ていく。認識構文と態度構文には、それぞれ以下のような3つの下位構文があり¹³、これらはい

¹³ 奥田(1968-72)では、本研究の「言語活動構文」は「通達のむすびつき」と呼ばれて、認識の連語とは別の連語として立てられている。つまり、心理的関わりの下位に、認識、通達、態度と、モデルな態度があ

ずれも対応している。つまり、認識構文の下位にある知覚認識構文（奥田は「感性的なむすびつき」と呼ぶ）は、「見る、聞く、感じる」などの《感覚・知覚》を表す動詞で構成されるが、これに対応する態度構文は、「愛する、憎む、敬う」などの《感情評価的態度》を表す動詞で構成される。知的認識は、一般に「思考動詞」とも呼ばれる「思う、考える、覚える、理解する」等の動詞で構成され、これに対応する態度構文は、「太郎を犯人と {見なす／判断する／考える}」といった知的態度構文である。最後の言語活動構文は、「言う、話す、しゃべる」等の言語活動動詞で構成されるが、これに対応するのは、「褒める、けなす、叱る、からかう」など、感情評価的な態度を言語活動で表す動詞で構成される表現的態度構文である。

認識構文

知覚認識構文（感性的）
 知的認識構文（思考）
 言語活動構文（通達・発話）

態度構文

感情評価的態度構文（評価的判断）
 知的態度構文（中立的判断）
 表現的態度構文

以上の下位構文タイプのうち、動詞「見る」が関わるのは、知覚認識、知的認識、感情評価的態度、知的態度のみである。よって、本稿ではこの4つの構文のパラディグマティックな体系について考察することになる。

なお、心理的関わり構文の周辺のなものとして、モーダルな態度構文と動作的態度構文がある（p. 3、図1参照）。モーダルな態度構文とは、要求、命令、願望、忠告、許可、禁止、意図、決心等、様々なモーダルな態度を表す動詞で構成される。例えば、「部下に出世を求める」（要求的態度）や「暗殺を企てる」（意志的態度）のような構文で、ヲ格が動作性名詞であることを構造の特徴とする。これらは、「出世しろと求める」「暗殺しようと企てる」のような意味を表すことから、「モーダルな態度」と名付けられている。このモーダルな態度構文におけるヲ格名詞は、認識や伝達といった心理的関わりの対象というより、要求や意志の内容である点で、ヲ格名詞の対象性が低く、心理的関わり構文の周辺に位置付けられる。

また、心理的関わり構文のもう1つの下位構文である動作的態度構文とは、物理的動作と心理的関わりの両方の意味や構造的特徴を併せ持つ構文である。「使う、待つ、守る、いじめる」などの動詞で構成される。

以下、心理的関わり構文の中心的な構文である認識構文と態度構文の下位構文タイプと、動詞「見る」との関わりについて考察していく。

ることになる。しかし、奥田が「通達のむすびつき」と呼ぶ言語活動構文は、ヲ格名詞が抽象名詞であるという点で知的認識構文に非常に近く、これは認識構文の下位タイプとしていいかもしれない、と奥田自身も述べている（奥田1968-72 [1983: 109]）。よって、本研究では、認識構文と態度構文の対応を考慮し、言語活動構文を認識構文の下位構文と位置付ける。

4.1 認識構文（知覚認識と知的認識）

認識構文とは、認識主体が認識対象を認識領域に捉えることをあらわす構文で、知覚認識、知的認識（思考）、言語活動（発話）という3つの下位構文タイプがある。それぞれの構文は次のような構造形式を持ち、次のような動詞で構成される。

{	知覚認識構文 [N ₁ 《人》ガ N ₂ 《具体・現象》ヲ Vt《知覚認識》] 「空を見る」「波の音を聞く」
	知覚動詞：見る、見つめる、眺める、聞く、嗅ぐ、味わう、感じる、等
	知的認識構文：[N ₁ 《人》ガ N ₂ 《抽象・現象》ヲ Vt《知的認識》] 「子育ての難しさを思う」
	知的認識動詞：思う、考える、知る、考慮する、反省する、心配する、悟る、等
{	言語活動構文：[N ₁ 《人》ガ N ₂ 《抽象》ヲ Vt《言語活動》] 「教育の大切さを語る」
	言語活動動詞：言う、話す、語る、述べる、しゃべる、告げる、知らせる、等

以下では、動詞「見る」を中心に、各構文タイプの特徴を見ていく。

4.1.1 知覚認識構文：[N₁《人》ガ N₂《具体・現象》ヲ Vt《知覚認識》] 「空を見る」

知覚認識構文は、対象を、視覚、聴覚、嗅覚、味覚などの知覚・感覚で認識し、捉えることを表す構文で、知覚認識動詞によって構成される。「天井を見つめる」「大きな音を聞く」など、ヲ格名詞が《具体物》もしくは《現象》というカテゴリーカルな意味であるのが構造の特徴である。よって、ヲ格が抽象名詞である場合は、その構造は知覚認識を表さなくなる。

具体物というのは、典型的には重力を持ち、視覚で捉えることができ、かつ触れられるものである。一方、現象名詞というのは、一般には「煙、風、雨」などの自然現象を表す名詞を指すことが多いが、ここではそうした自然現象に限らず、現象界に立ち現れる変化や動きのすべてを含んでいる。例えば、次のような名詞が現象名詞である。

(9) 光、音、声、姿、様子、景色、(小鳥の) さえずり、(川の) 流れ、(ビルの) 崩壊、等

奥田（1968-72 [1983: 93-94]）で述べられているように、抽象度の高い現象名詞は、その現象名詞を具体名詞が修飾する必要がある。例えば、「変化」や「動き」というのはかなり抽象度の高い現象名詞だが、(12)のように、「露出計の変化」、「時計の針の動き」のような限定を受けることで、《具体的な現象》という意味的側面が引き出され、動詞「見る」も知覚認識の意味と解釈される。

(10) 田中は山田の顔を見た。《具体物》

(11) 彼の元気な姿を見るとうれしい。《現象》

(12)

- (12) a. …カメラを向けて露出計の変化を見る。(竹中隆義『アサヒカメラ』)《具体的現象》
 b. 春子は時計の針の動きをずっと見ていた。《具体的現象》

一方、「見る」がヲ格の抽象名詞と組み合わせると、次に見る知的認識構文に移行する。

4.1.2 知的認識構文：[N₁《人》ガ N₂《抽象・現象》ヲ V_t《知的認識》]「子育ての難しさを思う」

知的認識構文は、対象を知的な、思考活動を行う認識領域で捉えることを表す構文で、知的認識動詞によって構成される。この構文の特徴は、ヲ格が《抽象》ないし《現象》を表す名詞であることで、具体名詞は対象とはならない。

- (13) 子供の将来を {思う／考える／考慮する／心配する／予想する}。

「見る」も抽象名詞のヲ格と組み合わせあって、知的認識を表すことがある。(14)や(15)では、「見る」は知覚認識の意味を失い、「考慮する」というような知的認識の意味になっている。また、先に見た「変化」などの抽象度の高い現象名詞が抽象名詞で限定されると、ヲ格名詞句は《抽象的現象》となり、動詞「見る」の意味も「知る、理解する」のような意味となり、知的認識に移行する（奥田1968-72 [1983: 94]）。

- (14) …霊能者の人間的な側面を見るべきだということです。(天教院照玉『霊能者』)《抽象》
 (15) 日本では、結婚の話を持ち出すと、家柄が見られる。《抽象》
 (16) 状況の変化を見て、次の対応を決めた。《抽象的現象》cf. (12)

こうした現象からも、単語（要素）の意味は、他の語との「関係性（構造）」の中で明らかになる、ということが分かる。

4.1.3 発見の構造：[N₁《人》ガ N₂ニ N₃ヲ V_t《認識》]

知的認識と知覚認識にまたがって奥田が「発見の構造」と呼ぶ構造があり（奥田1968-72 [1983: 105-07]、1967 [1985: 7-8]）、この構造に知覚動詞が入ると発見のニュアンスを帯びると同時に、ヲ格名詞のカテゴリカルな意味の制限がなくなる。それでも、ヲ格が具体名詞であれば知覚による発見を表し、抽象名詞であれば知的な発見を表すことになる。

- (17) 雲の合間に小さな機体を見た。【知覚認識の発見】
 (18) 香保が生命を賭して抵抗したことに、彼女の高木に対する愛の証しを見たような気がする。(森村誠一『雪煙』)【知的認識の発見】

ただし、抽象名詞がヲ格となる「見る」の例は、能動構文ではそれほど多くない。一方、次のような受身構文の例は、特に論説文などのジャンルに非常に多く用いられる（志波2015）。ここでは、非情物が主語に立つ受身構文の中で、動作主が背景化され、一般化されている。このことにより、「N₁にN₂が見られる」は「N₁にN₂がある」のような、存在の意味を表しており¹⁴、能動構文における「見る」とは別の構文として、パターン化していると考えられる。

(19) 宇宙飛行士に骨の退化が見られる。

(20) 多くの国に、共通の特徴がみられる。

4.2 態度構文（感情評価と知的態度）

次に、態度構文を見ていく。態度構文とは、主体が対象に対して何らかの心理的態度を向けることを表す構文で、認識構文と異なり、ヲ格名詞にカテゴリーカルな意味の制限がないのが構造的特徴である。すなわち、具体名詞でも抽象名詞でも、動詞の語彙的な意味に変更がもたらされず、同じ意味で用いられるのを特徴とする。例えば、「{良子/良子の立ち居振る舞い/平和}を愛する」のように、どのような名詞であっても、動詞の意味に変更が生じない。

態度構文にも、次のような3つの下位分類がある。

{	感情評価的態度構文 [N ₁ 《人》ガ N ₂ ヲ Vt《感情評価》] 「{彼女/文学/自由}を愛する」
	感情評価的態度動詞：愛する、嫌う、憎む、慕う、嫌う、悲しむ、敬う、疑う、等
	知的態度構文 [N ₁ 《人》ガ N ₂ ヲ N ₃ ト Vt《知的態度》] 「相手を敵とみなす」
	知的態度動詞：みなす、解釈する、判断する、規定する、決める、例える、等
{	表現的態度構文 [N ₁ 《人》ガ N ₂ ヲ (引用節 -ト) Vt《表現的態度》] 「聡を(すごいと)褒める」
	表現的態度動詞：褒める、称える、からかう、けなす、叱る、責める、非難する、等

そして、奥田（1968-72）では、この態度構文に一般的な構造として、次のような、「態度の構造」があるとする。

(21) 態度の構造 [Nヲ Xト/ニ Vt《心理的関わり》] 「娘を {愛おしく思う/疎ましく感じる}」

¹⁴ このことは、奥田（1960）でも指摘されている。奥田（1960）は、「青葉をとところどころにみる下町のかから屋根のあいだには…」 「上達するものの中には、まだ一人の婦人をみない」のような例を挙げ、「述語「みる」に対応すべき主体はぼかされていて、主語は省略されている。主語のない文である。この条件のなかでは、動詞「みる」の意味は／ある、あらわれる／にずれてくるのである」（奥田1985: 14）と述べる。現代日本語では、こうした能動構文は少なくなり、代わりに、動作主を背景化する受身構文が頻繁に使われていると考えられる。

この「NヲXト／ニVt」におけるXは、「N=X」の関係にある形容詞ないし名詞である。このXが典型的に感情評価の形容詞であるのが感情評価的態度であり、名詞であるのが知的態度である。名詞というのは典型的には評価性中立である。つまり、《評価性のない属性》というカテゴリカルな意味を持つ語がXであるのが、知的態度構文である、ということになる。

4.2.1 感情評価的態度構文：[N₁《人》ガN₂ヲVt《感情評価》]「{彼女／文学／自由}を愛する」

感情評価的態度構文とは、「敵を憎む」「祖国を愛する」「異文化を敬う」のような、感情評価的態度動詞で構成される構文であり、主体がヲ格対象に感情評価的態度を向けることを表す。一方、「思う、感じる、見る」のような認識の多義動詞は、先の態度の構造に入ることで、「{嬉しく／楽しく／心苦しく／不快に／残念に／羨ましいと／面白いと／当たり前と／可哀そうと} 思う」のように、感情評価的態度を表すことになる。ただし、「見る」の場合は、能動構文では主に「{軽く／重く／甘く} 見る」という組み合わせで用いられて、感情評価的態度を表す（奥田1968-72 [1983: 118]）。

(22) 膀胱炎を軽く見ない方がいい。【感情評価的態度構文】

(23) 彼は世の中全てを薄っぺらく見て、分かったようなことを言う。【感情評価的態度構文】

ところが、「見る」が「見られる」という受身形になると、次のように、かなり生産的にこの感情評価的態度構文を構成する。

(24) 彼女は {若く／スリムに／大人っぽく／大人しそうに／年上に} 見られる。

こうした受身構文は、「*私は彼女を若く見た」のように、能動構文で述べることはできない。このことは、こうした構文が能動構文から受身構文に転換されたものではなく、受身構文の中で感情評価的態度構文の用法が拡大したということを表している。

同じように、自動詞「見える」による構文も、「見る」とは異なる「態度の構造」を構成する。先に述べたように、「見る」では、感情評価的態度を表すのは「{甘く／重く} 見る」のような限られた組み合わせであるが、自動詞「見える」には次のように、独自の構文タイプが見られる。他動性構文にはない、[NガViテ《状態性》見エル]という構造形式もある。

(25) {水が青く／字が大きく／背が高く／部屋が広く} 見える。

(26) {水面が光って／目が潤んで／行間が詰まって／先が尖って／部屋が膨張して} 見える。

(27) 冬美は {疲れて／がっかりして／老けて／落ち着いて／大人しく／神経質に} 見える。

「見える」がこのように構文を拡大したことにより、証拠性判断の意味を表す「～と見える」という構文が発達しているのだと考えられる。つまり、「見える」は単に対象が視覚領域に自然に入ってくるという意味を表すのみならず、その対象を「様子」とともに捉える構文が拡張し、さらには、「AはBであると見える」（「彼はこの家の主人であると見えて、スーツを着ている」等）のような根拠（証拠）に基づく判断を表す構文を拡張させているのだと考えられる。

以上の考察から分かることは、「見る」と「見られる」、「見える」という各動詞（形）は、いずれも「態度の構造」の要素となってその構造のなかで評価的判断や中立的判断を表すのであるが、「態度の構造」の拡がり各動詞によって範囲が異なり、それぞれ独自の構文タイプとして確立していると考えられる、ということである。

4.2.2 知的態度構文：[N₁《人》ガ N₂ヲ N₃ト Vt 《知的態度》]「相手を敵とみなす」

知的態度は、「対象AがXである」という対象への知的な判断を表す構文で、評価性には中立である。この構文は、知的態度を専用に表す「見なす」などの動詞もあるが、多くの場合、知的認識動詞（思考動詞）がこの構文を構成する。上述したように、「AヲXト／ニ思考動詞」という態度の構造におけるXは、知的態度では典型的には名詞、また、評価の意味のない属性形容詞である（奥田1968-72 [1983: 122-24]）。「名詞」というのは単語の文法的な機能（主語・補語になるか否か）や形態論的特徴に基づく分類である。名詞は、一般的に「実体（モノ）」を表すため、こうした名詞の意味がカテゴリカルな意味となって発揮されることもあるが、この構造では名詞の《評価性に中立的な属性》という意味が問題になっていると考えられる。

(28) マスコミや報道を真実と思った人々は、…（『神戸新聞』2004年）

(29) 彼は自分を笑っているような、人生を遊びだと理解しているところがある。

「見る」や他の知覚動詞も、名詞と組み合わせさせて知的態度構文を構成する（奥田1968-72 [1983: 120]）。

(30) 二十六歳の相賀武夫も震災を商機と見た。（猪瀬直樹『マガジン青春譜』）

(31) 教師は僕のことをクロだと睨んでいたようです。（村上春樹『レキシントンの幽霊』）

このほか、感情評価的態度動詞も、こうした知的態度の構造の要素となることがある。次の例では、知的な判断を伴った感情評価的態度を表している。こうした文は、動詞の結合価によって組み立てられたとは考えにくく、態度の構造が日本語の中で動詞とは相対的に独立し

て、安定して存在することの証だと考えられる¹⁵。

(32) 彼女は山田さんを会社員の模範と尊敬していた。

(33) 安曇野を心のふるさとと愛した、いわさきちひろ。(『オレンジページ』19巻14号)

以上の考察から、知的態度構文の構造形式をより正確に書くなら、次のようになるだろう。

(34) 知的態度構文 [NヲX《評価性に中立》ト心理動詞] X=名詞、属性形容詞

さらには、実質的な意味のない「する」という動詞までもが、この態度の構造の要素となつて知的認識構文を実現する。

(35) …ティラーも、ルールの政策を望ましいとする¹⁶。(森映雄『金融・証券システムの革新』)

この構文はさらに、非情物を主語とする次のような構文にまで拡張していると考えられる¹⁷。

(36) この活動は、自然保護を目的としている。

最後に、態度構文が他動性構文のネットワークを超えて、他の構文とも連続的であることを見る。次の例(37)では、「細かく」は動詞「見る」の動作の仕方・様態を修飾する連用修飾成分である。一方、(38)は、知的態度と連用修飾の中間的な例となっている。この例では、「難しく」が「考え方」の様態を修飾しているとも解釈できる一方、「ワインの組み合わせが難しいと考える」という知的態度の解釈も可能である¹⁸。何度も述べたように、(34)のような知的

15 奥田(1968-72)では、「認める、確認する」などの一般的な認識動詞(ヲ格名詞のカテゴリカルな意味に関わらず、一般的な認識の意味を表す動詞)や「聞く」などの知覚動詞もこの「態度の構造」の中で知的認識の意味を表すことから、「この種の構造の相対的な自律性、安定性、つよさがあきらかになる」(1983:120)と述べる。

16 「望ましい」は評価性のある形容詞であるが、態度の構造であることに変わりはないため、ここでは知的態度構文としておく。

17 この「NをNとする」は、動詞「する」がもはや本動詞ではなく、「トシテ」という形で後置詞的になり、「Nを【前提/中心/基本】として考える」のような知的態度構文を構成する要素となっている。なお、「NヲNトスル」構文に類似した「XヲYニスル」構文については、劉佳・志波(近刊)も参照。

18 奥田(1968-72)では、知的態度の構造を補うのは通常名詞であり、形容詞の中止形になると「様態規定的」になると述べ、「日本へもどってからの自分の勇気をあじけなく考えている」のような例が上がっている(奥田1983:123)。

態度構文の構造において、Xは通常名詞であるが、これが形容詞である場合にこのような重なりが生じるようである。こうした中間例の存在は、連用修飾の構文と態度構文が、それぞれ別の大きな体系を形成しながらも、隣接して重なり合っていることを示している。

(37) この図をもっと細かく見ると、別のことがわかってくる。【連用修飾】

(38) 料理とワインの組み合わせを難しく考える前に、とにかく好きなものを食べて飲むべし、というわけだ。(小林祐子／田所佐月『Hanako』)【中間的】

以上、本節では、主に動詞「見る」を中心に、心理的関わり構文内での、下位構文の移行関係、連続性を考察した。

(39) 具体／現象名詞と組み合わせる構造：知覚認識構文「彼女の目を見る」

→抽象／現象名詞と組み合わせる構造：知的認識構文「相手の家柄を見る」

→発見の構造：「彼の言葉に一途な思いを見た」存在「多くの国に共通点が見られる」

→感情評価形容詞と組み合わせる構造：感情評価的態度構文「試験を甘く見る」

→名詞と組み合わせる構造：知的態度構文「震災を商機と見る」

(→属性形容詞と組み合わせる構造：知的態度構文…連用修飾構文と連続的)

今回は、特に動詞「見る」を中心に構文間の関係を考察したため、言語活動構文と表現的態度構文については触れることができなかった。しかし、すべての下位構文タイプは、構成要素のカテゴリカルな意味や格体制の違いによって対立しながら、ある構造的な条件のもとで他の構文タイプと連続的になり、移行する、というパラダイグマティックな体系を成している。そして、そうした構造的な条件として重要なのが、カテゴリカルな意味であることを見た。

5. おわりに

本稿は、奥田のヲ格連語論を下地として、これに修正を加えながら日本語の他動性構文を体系的かつ網羅的に記述することを目的とし、その第一段階として、奥田の構文理論について、心理的関わり構文を例に考察した。本稿の議論は、他動性構文を記述する上での方法論を提示したもののだが、こうした「構造」と「要素」、そして、構造の要素としての「カテゴリカルな意味」という観点は、すべての文法現象に応用できる方法論であると考えている。

構造というのは要素間の関係の秩序であり、そうした構造は繰り返し使用されることで社会慣習的に、私たちの記憶に実在する言語の単位であると考えられる。工藤(1989)も述べるように、具体的な現象としての「文」は無限であるが、その構造的タイプは有限の型として、

パターンとして実在すると考えられる。動詞であれ、名詞であれ、副詞であれ、また、機能語である、いわゆる副助詞や助動詞、補助動詞等、あらゆる語や接辞の意味は、それが構造の要素となったときに他の要素との関係性の中で決定されると考えられる。

本稿では、特に他動性構文の心理的関わり構文に焦点をあて、心理的関わりを表す文の構造的な特徴を記述し、他の構文との相互関係を考察した。この中では、特に構造的なタイプ、また、要素と構造が一体となった構築物としての構文という単位が存在する、ということ強調してきたが、実は構造的タイプや構文という捉え方を文法研究の方法論とする最大のメリットは、最終的な全体の意味を、要素と構造との相互作用によるものと捉えられる点であると考えられる。つまり、要素の意味（特性）は構造に影響を与え、同時に構造の意味（特性）は要素に影響を与え、最終的な全体の意味が生まれる、ということである。

本稿で提示した他動性構文のタイプは、多くの動詞に共通の型＝パターンとして存在するものである。一方、要素の持つ意味の特殊性や個性により、その共通の型は拡大や縮小をしながら、歴史的な流れの中で変遷していくのだろう。「見る」と「見える」、「見られる」は、「態度の構造」を共有しているが、態度の構造の生産性については、それぞれの動詞で異なっていた。私たちは、歴史的な文法記述の中で、こうした要素と構造のダイナミックな相互作用を捉え、意味の拡張を記述していかなければならない。同時に共時態の記述では、要素の持つ意味と構造の持つ意味がどのように影響し合いながら、最終的な意味となっているのかを考察しなければならない。今後も個々の動詞の多義や意味のあり方と構造の持つ意味とを慎重に観察しながら、日本語の他動性構文を記述していきたい。

用例抽出資料

国立国語研究所・現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ、データバージョン1.1)

参考文献

- 奥田靖雄（1968-1972）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12、13、15、20、21、23、25、26、28、むぎ書房（言語学研究会編『日本語文法連語論・資料編』むぎ書房1983、pp. 21-149に再録）
- 奥田靖雄（1985：論文集）『ことばの研究・序説』むぎ書房（「語彙的な意味のあり方」（1967）、「言語における形式」（1973）、「単語をめぐって」（1974）、「言語の単位としての連語」（1976）、「言語の体系性」（1980-1981）、本稿のページ数はこの論文集のページによる）
- 工藤 浩（1989）「現代日本語の文の叙法性 序章」『東京外国語大学論集』39（工藤2016『副詞と文』pp. 227-253（ひつじ書房）に再録）
- 志波彩子（2015）『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』和泉書院。
- 茶谷恭代（2020）「動詞『つかむ』の多義の記述」日本語学会2020年秋季大会ワークショップ「奥田靖雄構文理論の継承と発展」予稿集 pp. 256-259.
- 仁田義雄（1974）「日本語結合価文法序説—動詞文シンタクスの一つのモデル—」『国語学』98: 93-112.

- 仁田義雄 (1983) 「結果の副詞とその周辺—語彙論的統語論の姿勢から—」 渡辺実 (編) 『副用語の研究』 pp. 117-136, 明治書院.
- 早津恵美子 (2015) 「カテゴリーカルな意味(上)—その性質と語彙指導・文法指導—」 『東京外国語大学論集』 91: 1-33.
- 早津恵美子 (2016) 「カテゴリーカルな意味(下)—その性質と語彙指導・文法指導—」 『東京外国語大学論集』 92: 1-20.
- 早津恵美子 (近刊) 「「カテゴリーカルな意味」をめぐって—奥田靖雄の連語論とカテゴリーカルな意味—」 斎藤倫明・修徳健 (編) 『語彙論と文法論をつなぐ』 (ひつじ書房)
- 劉佳・志波彩子 (近刊) 「XヲYニスル」 構文の記述的研究—状態変化と態度 (意義づけ) —」 『名古屋言語研究』 16.
- Croft, William A. (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford University Press.
- Croft, William (2003) Lexical Rules vs. Constructions: a false dichotomy. *Motivation in Language: Studies in honor of Günter Radden*, eds. Hubert Cuyckens, Thomas Berg, René Dirven & Klaus-Uwe Panther, 49-68. Amsterdam: John Benjamins.
- Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press. (河上誓作他訳 2001 『タイプ文法論—英語タイプへの認知的アプローチ—』 研究社出版)
- Shiba, Ayako (2011) Changes in the Meaning and Construction of Polysemous Words: The case of *mieru* and *mirareru*. In Kawaguchi, Yuji et al. (eds.) *Corpus-based Analysis and Diachronic Linguistics*. 243-264. Amsterdam and Philadelphia, John Benjamins.

キーワード：他動詞、構文 (構造)、体系、心理動詞、知覚動詞

AbstractToward a description of Japanese transitive constructions:
Inheritance and development of the constructional theory of Yasuo Okuda

SHIBA, Ayako

This study aims to re-describe Yasuo Okuda's series of work on "Constructional types of the combination of accusative nouns and verbs", modifying it as a theory of transitive constructions. As a preliminary step, I will discuss his ideas of "system," "construction," and "element" using the constructions of psycho-verbs as examples.

According to Okuda, "construction" is the order of relations between elements. The elements, which are parts of a whole, are not gathered together in a meaningless and disorderly manner, but are connected in a meaningful way to form a whole. In the Construction Grammar of Cognitive Linguistics, the construction is sometimes discussed as if it were an entity which is completely independent of its elements; however, since construction is an order of relations among elements, it is not completely independent of its elements and its independence is relative. Nonetheless, they have in common that constructions are socially real as conventionalized and generalized patterns through repeated use. Constructional patterns affect the elements as a relatively independent organizations of meaning and form, and at the same time the quality of the elements defines the construction.

In addition, we proposed the importance of the "categorical meaning" of words as an element in the construction of a sentence. "Categorical meaning" is an aspect of lexical meaning of a word that is exhibited when it participates in the construction of a sentence. It is a semantic aspect common to words that enter the same grammatical construction.

The verb *miru* (to look) expresses visual perception when the object is a noun with the categorical meaning of a concrete object. In contrast, when it is combined with an abstract noun, it expresses mental cognition (thought). On the other hand, when combined with an adjective with the categorical meaning of evaluation, such as *A-o amau-ku miru* (take A too easy), the construction expresses an emotional evaluative attitude. In addition, when combined with nouns that are neutral in evaluation, the construction *A-o B-to miru* (to regard A as B) expresses the meaning of judgment. Thus, when there is the change in categorical meaning of each element, one construction moves to another. This relationship between constructions is what we call a paradigmatic system (network) of constructions.

Keywords: transitive verb, construction, system, psycho-verb, perception verb